

## 開催県関連企画

群馬県立文書館・官営富岡製糸場

### 群馬県立文書館視察研修会の参加記

東京都公文書館 中元 幸二

第37回全国（群馬）大会の終了翌日、10月29日（土）朝10時から開催された群馬県立文書館の視察研修会に参加した。当日は10月の終わりにしてはとても暑く、連日の大会で様々な準備や事務をこなされ、通常通りの開館業務と古文書講座が開催中にも関わらず、設定時間を1時間も多く岡田昭二氏より丁寧に案内していただいた。

最初に集合場所の1階ロビーで群馬県立文書館の歴史と概要の説明がなされた。初の単独館として開館以来29年が経過し、施設・設備に老朽化が進んでいること、平成7年に県庁舎建替えに伴い書庫を増築して現在の姿になったことなど、設置以来の経過や事業内容、現状の課題まで簡潔にまとめていただいた。

そして、各施設を巡回しての説明のなかで、6月～9月に実施した東日本震災で被災した宮城県女川町役場文書の救済活動にも触れられた。4か月間で約350冊のクリーニング作業を10名程の人数で行い返却した作業について話された。震災発生から3か月で被災資料を受け入れて適切な処理を完了させたスピードと積極性に目を見張った。

書庫・事務室・作業室など各施設の見学では、確かに今となっては古くなっている様子が見られ、建て増しによる新旧館との連結が隣接する古墳の敷地を避けたためにスムーズに行かなかったこと、書庫と閲覧室・作業室を結ぶ導線と閲覧者が入出館して閲覧室と行き来する経路が重なり交差する混線が生じていることなど、単館として初めて設立された



館ならではの経験から来る悩みを表明された。とりわけ1階ロビーに隣接する展示室が、文書館としては必須な施設ではなく、群馬県が最初に設置したために、以後の展示室設置への影響を気にしておられた。

筆者はむしろ単館を設置したこと自体の影響が第一で、文書館の役割・事業や認知を高めたい館では展示室には何か役割があることも考えられるので、多様な可能性を提示すると理解したい。また、書庫には自動書架の設置など書架延長に努め、施設が老朽化しつつも様々な工夫が凝らされていることに注目した。

女川町役場文書の救済活動にしても多量の被災現用文書の処置には、新設館でも即応できる施設を用意してはいないだろう。それでも実施できた背景は、日頃から作業場や事務室でも十分に使い切る姿勢があったからではないだろうか。道具や置き場所の不足よりも現状から出発し、処置技術の吸収や器具の装備を行い、どの文書館でもノウハウが欠落しているコンサーベーションの能力を高めていく。文書館の役割・機能が人員・施設と密接な関係にあることを改めて考えさせられた。